

いつも、よい気分？

高野 健三

私は船(の揺れ)には強いほうであるが、それでも椅子がひっくり返るほどになると多少は気分が悪い。机の上から本が落ちてもとで拾えばいいと思うようになる。身のまわりに何がおきても「どうでもいい」とか「まあ、いいか」というなげやりの気分である。昨年夏、外国の観測船に乗っていたとき、とび抜けて高齢の私に「若い時との一番大きい違いは何ですか」という質問があった。

「いつも船酔い気分。たいていのことはどうでもよくなってしまう」

「では、年をとってもどうでもよくないことは何ですか」

「大しけの時、食卓から皿や酒瓶が落ちてゆくこと」大しけともなれば、食堂に出てくるのは私だけということになりかねない。食卓が傾いて、皿や瓶が滑りだす。食卓の縁を乗り越えて(しけに備えて食卓の縁には柵がついていて、これを引き上げると落下防止の壁ができる)床に落ちないように一人で抱えこむ。どうでもいいと構えていたら食物がなくなってしまう。

筑波大学にきて間もないころ、ある会議で、のちに研究科長となるY先生から「研究業績を重んずるようになったら、講師も助教授も研究に励み、雑用をしなくなる。そのぶん教授の雑用がふえるから困る」といわれたことがある。

「教授は年をとって研究能力は落ちているのだから、それで結構ではありませんか」

「研究能力が落ちているのはあなたのことでしょ。私たちは違うのです」

(「雑用で忙しくて・・・」としばしばきくけれども、その多くは本業だと思う。もし本当に雑用ならなぜそれをへらす努力をしないのだろう。)

また、ある教授間協議会で、研究科長は「だいたいな議題が残っていますが、今日は重要メンバーがみなさん欠席ですからこれで閉会としましょう」

こうしてみると私は能力の乏しい泡沫教官だったようである。

もうすこし若かったら泡沫教官から抜けでる努力をしたはずであるが、「まあ、いいか」の船酔い気分のうちに13年あまりがたってしまった。これほど長く同じ所で働いたことはなく、多くのことを学んだ。

ここへ来るまで、国内・国外のいくつかの機関で働いたが、どこもかなりいい加減なところがあって、中には「組織としてなっていない」と立派な機関の人からいわれていたものもある。そういう環境にいたものだから、万事がきちんとしている所にて目をみはる思いであった。日本の教育の原点にふれた思いもあった。昔、私は大学進学にあたって受験科目が最も少ない学科をえらび、つぎに、なんとなく大学院に進んだが、こういう学生はこの研究科には入れない。あそこでは「計画性」という言葉を聞いたおぼえがない。しじゅう聞かされていたのは「研究第一」であった。そうであったことは運がよかったと今になって思う。